

雨宮ひとみ 著
エクスペリエンス 原作

死印

しいん

PHP



序章

3

第1章 花彦くん

1

第2章 森のシミ男

21

第3章 くちやら花嫁

93

第4章 ずう先生

225

第5章 觀音兵

265

終章

335

155

序 章



湿気を帯びた生ぬるい風が肌にまとわりついてくる。

視線の先には蒸し暑さに沸き上がった陽炎が、地面を這うように揺らめいていた。

そういえば先ほど、飲食店を出た際、「雷が続くと梅雨が終わる」と、あいつが空を見上げて
いた。本当かどうかわからない。何せ得体の知れないヤツだ。が、地響きのような音が、遠くの
空から聞こえる気もする。

一雨来ては厄介だ。

俺は歩調を早め、駐車場脇の砂利道をざくざく進んでいく。

すると前方から、やたらはしゃぐ甲高い声が耳に飛び込んできた。

「あのさ、聞いてくれる?」

「ん、なに?」

「ちょっと気持ち悪い話なんだけど、いい?」

「オーケー」

女子高校生二人組だ。器用なことに、まつ毛や口元にメイクを施しながら、二人は靴底を引き
ずるように進んでいた。

「山口つているじyan? 古典の、女の先生」

「あー。眼鏡かけた地味系の」

「そう。なんかアイツ、急にいなくなっちゃったんだって」

「え? 行方不明とか?」

「ううん。図書室でいきなり消えちゃったんだって。……腕だけ残して」

「なにそれ、こわ！」

「でしょ!?」

話はこうだつた。

山口という古典の女教員が、放課後の図書室で調べものをしていたらしい。

伝奇に関する本を、図書委員の友人が貸し出したことで、室内にいるのは確かだつた。だが閉館時間になつても、山口は出てこない。

真面目な性格ゆえ、挨拶しないまま帰つてしまふのは考えにくい。

おかしいと感じた図書委員は、山口がよく座つているいちばん奥の死角エリアを覗きに行ってみた。

すると、そこに山口の姿はなく――。

血まみれの腕だけが転がつていた。

ボールペンを握つたまま、机の上にごろんと。直前まで書き物をしていたような腕だつたという。「しかもさ、腕には変な痣があつたんだつて。犬に噛まれたみたいなキモい痣」

「マジで!? ……あ。そういえば美樹みつきつちも、足に変な痣ができたつて言つてたけど。まさかね」「もしかしたらだけど……。『呪いの痣』の噂うわさ、ガチだつたりして？」

「や、やめてよ。夜中に試験勉強すんの怖くなっちゃうじゃん」

「あははっ。やんないくせに」

俺はコートの襟えりを少し立て、彼女たちの声を遮さえぎつた。

恐ろしげに話しているが、本気で信じているわけではあるまい。その証拠に、遠ざかっていく

彼女たちの話題は、早くも人気アイドルの新曲情報に移り替わっている。

たわいもない怪談話。もしくは家に帰るまでの退屈しのぎといったところか。

噂など、所詮そんなものだ。

周囲の街灯がパチパチと連動するように灯り始めた。

あいつの長話につきあつていたせいで、すっかり遅くなってしまった。

いつの間にか頭上には黒い雲が立ち込めており、いよいよあやしい雰囲気だ。俺は再び、歩くペースを早めた。

◆◆

気がつくと見知らぬ場所に立っていた。

俺は眼鏡を外し、二、三度、まぶたをこする。そしてぼやけた視界を正常に戻そうとした。だが、なかなか焦点が定まらない。遠くからは、今もくぐもつた音が響いているようだが、耳鳴りが止まないだけのようにも思う。

喉が異様に渴き、身体全体が熱かった。また、頭と心臓が同期したように、ドクドク脈打つている。酩酊めいていしたときの不快感と似ていた。

俺は近くの木にいったん手を添え、荒い呼吸を整える。

この症状はなんだ？ 俺の身体に何が起こっている？

そのまま視線を落とすと、足元にはきれいに刈り込まれた芝生があつた。適度にふかふかした踏み心地で、手入れをしている者の几帳面きょうめんさを感じる。

公園？　もしくはどこかの庭だろうか？

息を整えた俺は暗がりに目を凝らす。すると向こう正面に、大きな館が見えた。

重厚な佇まいの古めかしい洋館だ。

中央には西洋風の小塔があり、文化的価値がある明治・大正時代の建物を思わせた。壁に走る

ヒビも、館の外観に合っており、不思議な趣おもむきがある。

しかし、俺はどうやってここまで来たのだろうか。

砂利が敷かれた駐車場の脇を歩いていたのは覚えている。女子高校生たちが『呪いの癌』なるものについて話していたのも記憶にある。

だが、それ以降の記憶がすっぽり消えてしまっているのだ。まるで意図的に消去されたよう

に、記憶が残っていない。こんなことあるだろうか？

俺はひとまず冷静になろうと、現在の時刻を確認しようとした。だが、反射的に上げた左手首に腕時計はない。

コートの中だろうか、とポケットに手を差し入れる。だが、金属類の手触りはなく、代わりに指先をかすつたのは一枚の名刺だった。

そこには流麗りゅうれいな文字で、

【九条館主人 心靈治療家 九条さや】

と、書かれていた。

「九条……、さや……」

聞いたことがある名前に思う。しかし思い出せない。思い出そうとすると、脳内に霧がかか
り、名前の場所まで辿り着けない。

俺はヒントを求め、名刺の裏を見た。全面に建物の写真が印刷されている。

生い茂る木々に囲まれ、木漏れ日の中に建つ美しい洋館。

日中の写真のため、パッと見ではわからなかつたが、それは目の前にある大きな館を撮影したものだつた。

「九条館……？ この館は『九条館』というのか？」

名刺によれば『九条さや』という人物が、この館の当主ということになる。

確かめてみるしかない、と俺はワラにも縋る思いで玄関口まで進み、ぼんやり発光する洋灯の下、呼び鈴を探す。しかし見当たらなかつたため、仕方なく、立ちはだかるような扉を勢いよくノックしてみた。

「すみません！ あの！」

ドンドン！

「どなたかいらっしゃいませんか？」

反応がないため、今度は強めに叩いてみた。だがやはり返事はない。

「……誰もいないのか」

俺はいつたん玄関口を離れ、館全体が見渡せる位置まで戻る。先ほどは確認しなかつたが、窓
がすべて真っ暗であれば、館の住人は留守である可能性が高い。

すると見上げた先の二階の一室に、ちょうど明かりが点いた。

住人がいることにホッとした俺は、再びノックをしようと片足を踏み出す。そのとき――。

「きやああああああああーっ！」

と、女性の絶叫が建物内から響いた。

声の方向からして、明かりが点いた部屋からだ。再び見上げると、明かりは消え、窓は暗くなつていた。

俺は即座に玄関口まで戻り、今度は手加減なしに思いきり扉を叩く。

「どうしたんだ！　おい！　おいッ！　開けろッ！」

だが、先ほど同様、開く気配がない。

待つっていても仕方ないと、ドアノブを捻^{ひね}つてみたところ、扉はあっさり開いた。

施錠^{ただごと}されていなかつたのか、と不用心に思いながら、俺は二階の部屋へ急ごうとする。あの悲

鳴は只事ではない。

屋敷内に入ると、広がっていたのは吹き抜けになつてゐる玄関ホールだつた。

壁には何枚もの絵画。ヨーロピアン調の優美な飾り棚。並べられた数々のアンティーケ。

シャンデリアの下、幅広の階段が二階へいざなうように広がつてゐる。

そして、どこからか秒針の時を刻む音が聞こえていた。

窓から差し込む薄明かりがおぼろげに空間を照らしており、ホール内には不気味な美しさがあつた。

だが今は、それらを見物している場合ではない。俺は広々としたホールを横切り、中央の階段

へ走る。

そのときふと、誰かが自分を見つめているような気がした。

射すような真っ直ぐな視線に、俺は足を止め、身体をひねる。しかし後ろには誰もいない。扉にも目を向けたが、後から誰かが追つて入ってきた形跡はない。

気のせいか。

俺は再び、悲鳴が聞こえた二階左奥の部屋へ向かつた。

◆◆◆

部屋のドアを開けた瞬間、妙な匂いが鼻先に押し寄せてきた。

「何だ、この匂いは」

熟した果実のように甘つたるく、アロマテラピーと呼ぶには不快。数日置いた生ものが、発酵した匂いに近かつた。

俺は咄嗟に袖で鼻を覆い、薄暗い部屋に足を踏み入れる。

玄関ホールと同じく、こちらも西洋風の部屋のようだ。だが二、三歩進んだところで、早くも足を止めた。靴底に違和感を覚えたのだ。ぴしやり、となにか水っぽいものを踏んでいる。

この感触……嫌な予感しかしない。

ゆっくり視線を落とすと、フローリングに水溜りのようなものが広がっていた。
わずかな光源の中、見えるのは赤っぽい液体だ。それは今もなお、ゆるやかに広がり続け、靴底を取り囲みつつある。

瞬間、カツ！と閃光に室内が包まれた。フラッシュライトのような強い稻光だ。同時に、床に浮かび上がったのは——。

腹を引き裂かれ、血だまりに横たわる女の身体だった。

「……っ！」

俺はよろめくように半歩後ずさる。

わずかに開かれた女の口元は、自分がもう死体であることを示すように、ピクリとも動かない。裂かれた腹からは、どういうことなのか妖しい草花が飛び出し、群生するように首元まで伸びている。

それらは女の臓物を刃物のように切り裂き、微動しながら、赤くぬらぬら輝いていた。

この世のものとは思えないグロテスクな光景。只々おぞましいの一言に、俺はこみ上げる吐き気を手で押さえ、死体から目を逸らした。

これは現実なのか？あの植物はなんだ？何故人間の腹から、草花が飛び出しているんだ？
「この死体が……九条さや……なのかな？」

九条さや、九条さや。ここに來てもなお、思い出せない自分の脳が呪わしい。

すると視界が急にパッと明るくなつた。天井の照明がいきなり灯つたのだ。誰かがスイッチを入れたのか、と俺はすぐさま視線を巡らせるが、誰も見当たらない。
しかしぬる瞬間、恐ろしい事実に気がついた。

女の死体が——消えている。

フローリングに血痕だけを残し、妖しい草花も、流れ出ていた血も、忽然と部屋からなくなつ

ていた。目を逸らしたのは、ほんの一、二秒だ。そんな一瞬の間に、死体が蒸発するように消えてしまった。

どうしたことなんだ？　俺は何か、夢を見たのだろうか？
理解を超えた現象に、思わず乾いた笑いがこみ上げる。

そうだ、そうに違いない。いま見たものはすべて夢だ。九条館こじょうかんまで来た記憶が曖昧なことも、ぜんぶ悪い夢なのだろう。

そうすれば得体の知れないこの恐怖から、いますぐ逃れることができるのだ。
だが、状況がそれを許してくれなかつた。周囲には依然として甘つたるい臭気が漂つており、床には人影のような血の跡がくつきり残つている。
俺は身体をひるがえし、異様な状況から逃げるよう一目散に走り出した。

◆◆◆

「……ハア、……ハアツ」

屋敷中央の階段を俺はひたすら駆け下りていた。

警察に連絡すべき状況だ。しかしながらと言ふ？　女の腹を切り裂くように花が咲いていた？
その後、死体は霞かすみのように消えてしまつた？

すべて事実だ。だが、信じてもらえない。言つたところで、疑われるのはまず俺だろう。自分で言うのも何だが、客観的に疑わしいのは俺しかいない。
「なんだこの状況は……」

誰に言つて いるわけではないが、思わず不満の声が漏れてしまう。

「俺は いったい、何に巻き込まれてるんだ……」

降り立つた玄関ホールは先ほどの洋室同様、明かりが灯されていた。ご丁寧なことに枝分かれした燭台の炎まで、すべてチラチラ揺れている。

改めて見回すと調度品が並べられた空間は、さながら小さめの美術館といったところで、古めかしくも美しかった。が、やはりそれらに構っている場合ではない。俺は即座に入ってきた扉まで走り、ドアノブに手を伸ばす。

とにかく外気に触れたい。まずは動搖する自分を落ち着かせたかった。正直に言えば、何もかも見なかつたことにして、さつさと九条館から立ち去りたい。

……いや、むしろそれでいいのではないか？ 死体はもう消えてしまつたのだ。無理に通報することもあるまい。

そのとき、背後でカタン……と小さな物音がした。

反射的に振り返ると、もう一度カタン。

何故かその音は、俺が出ていくことを引き止めているような気がした。

そういえば館に入ったとき、背中に強い視線を感じた。もしや、この空間には何者かが潜んでいるのだろうか？

俺は再度玄関ホールに視線を這わせる。すると死角だった階段横に、赤いソファがあることに気がついた。

そして、その中央には——。

人間が座っていた。

金髪の少女だ。ゴシックティリストの黒い帽子に、黒いドレスを纏^{まとい}っている。少女は目を閉じ、周りの調度品と同じく、ただ静かに座っていた。

俺は人がいたことに驚きながら、恐る恐る声をかけてみる。

「……おい」

「」

もう一度呼びかけてみたものの、少女は黙つたまま微動だにしない。

眠っているにしても動かなきすぎる。その姿はまるで、呼吸していないように見えた。

不吉な想像に、ジワリと汗が背中を流れる。

まさか死んでいるのか？ 二階で見た死体同様、ドレスの下で腹を裂かれているのではないだろうか？

息があるかどうか確かめてみるべきだろう。が、ここでまた、身の毛もよだつ現象に巻き込まれたらどうする？ 引き返すなら、今だ。

「……」

迷ったあげく、俺はおずおずと赤いソファの少女に近づいていた。少女が生きていた場合、ここで放つて去るのも、それはそれで良心らしき部分が、ちくちく痛むというものだ。

だが、ソファまで辿り着かないうちに、あることに気がついた。

人間じゃない。これは人形だ。

折り曲げられた肘^{ひじ}の部分に『球体』が埋め込まれている。確か『球体関節人形』という代物だ

つた。名前の通り、肘や膝などの関節が、球体のパーツにより動かすことのできる人形だ。

「おぞらく先ほどの物音は、この関節部分が軋んだものだろう。」

「脅かすなよ……」

死体でなかつたことにホツとしつつ、俺はどこか拍子抜けした気分で、再び扉に向かおうとする。やはりこれ以上、この屋敷にいる必要はなきそそうだ。

だが。

「ようこそ、『九条館』へ」

「……え……」

声に振り返ると、大きな瞳をパチリと開けた人形が、ジイツとこちらを見つめていた。

「驚かせてしまいましたか？」

人形が、喋った。

「そうでしたら申し訳ございません。普段は人形のフリをするよう、主人に命じられておりましたので」

女の死体を見つけたときは異なる、別の戦慄が背中を走る。

先ほどまでの怪奇現象は、まだどこか他人事でもいられた。だが今は違う。人形がこの瞬間に、自分に向かつて語りかけているのだ。

しかし、今はどうにも思考の動きが鈍い。

すると、人形は瑠璃色の瞳を瞬かせた後、ゆっくりした動作で行儀よく手を組んだ。

まばたきすることも、動くこともできるらしい。顔も驚くほど精巧に造られており、腕の球体

関節を見なければ、少し無表情な西洋の美しい少女で通るだろう。

「私の名はメリイと申します」

「メリイ……」

「はい。あなた様が見たであろう異変は、既に察知しております
メリイはどこか悲しそうに目を閉じた。

「二階奥の部屋で、九条さや様の死体を見つけられたことも……」

「九条さや。やはり死んでいたのは、この館の当主ということらしい。

「我が主人、九条さや様は【シルシ】から逃れることができなかつたのですね」

「シルシ？」

思わず聞き返す。シルシ、聞き慣れない言葉だつた。するとメリイの声に、少し驚いたよう
抑揚^{よくよう}がついた。

「あなた様も、その腕のシルシについて、亡き主人を訪ねてきたのではないですか？」

「いや……。そもそもシルシとは……」

「右手首をご覧ください」

メリイの言う通り、右腕を上げ、手首を回してみる。すると外側に当たる部位に奇妙な痣を発
見した。

「何だこれは……いつの間にこんな……」

痣はこの瞬間に焼印でも押されたかのように赤く腫れ^は、何かに噛まれたような形をしていた。
「何かに噛まれたような」

その言葉に、夕方、駐車場の脇道で聞いた女子高校生の声が蘇る。

『しかもさ、腕には変な痣があつたんだって。犬に噛まれたみたいなキモい痣』

特徴が似通っている。あのとき聞いた話によれば、図書室にいた女教員が、突如消えてしまつたという。残されていたものは机に転がつた腕のみ。そこに痣が刻まれていたとのことだつた。
「じゃあ、この妙な痣がシルシだというのか？」

「はい」

「……」

では俺は九条さやに会うために、この館を訪れたのか？ 名刺の肩書は、『九条館』の当主であることと並んで『心霊治療家』とも書いてあつた。

シルシの治療……少々オカルト的な響きもあるが、辻褄つじつまは合つている。

「きや様はシルシから逃れる方法を調査しておりました。その亡き主人に代わり、あなた様にお伝えすることがござります……。ですが、その前に」

メリイは一つ尋ねたいことがあると言う。

「あなた様は、ご自身の名前がわかりますか？」

「名前？ なにを聞くかと思えば」

わかるに決まつてゐる。幼児でも答えられる質問に、俺は慚然ぶぜんとしながら口を開く。

「俺の名前は……」

「」

「俺の……」

何故だ？ 何故すぐ出てこない？ どうして自分の名を答えられない？

九条さやのときと同じだ。名前を探そうとすると、一瞬にして頭の中に濃い霧が湧いてくるのだ。恐ろしくらい真っ白な脳内に、俺は愕然としていた。メリイは俺の顔を見ながら「なるほど」と、わずかに首を動かす。

「やはりそうでしたか」

「……心当たりがあるのか」

「はい。ですが、その。些いさきか不便でございますね。どうお呼びすれば良いかわからないのはメリイは仮の名前なり、なにか呼び方を考えてくれという。

「そう言われても名前など……」

好きな音楽、映画、愛読書などからでも、とメリイは饒舌じょうぜつに提案していく。

「好みの食べ物なども良いかもしません」

しかしどれも、記憶の中から引っ張り出せない。

いま俺にわかるものは「大きな屋敷に心細く立ち竦すくんでいる一人の男」ということだけだ。

その答えにメリイは口は動かさず「ふむ」と頷いたような声を上げた。
「では、そちらから取るのはどうでしょうか？」

「そちら？」

八敷やしき一男様かずお、という名前です」

「……八敷……一男」

「はい。なかなか立派な響きに聞こえるのですが」

立派かどうかはわからない。ただ仮の名前でもあつたほうが、行き所のない魂が落ち着いてくれる気がした。

「なら、それでいい」

「承知しました。では八敷様。シルシについて、お伝えすることにしましょう。そのシルシは、いわば死の刻印」

刻まれた者は、近いうちに命を落とすとメリイは付け加える。

「な……!?」

「信じられませんか？　しかし、それが事実であることは、八敷様がいちばんよくわかっているはず」

「……九条さやの死か」

「はい。主人の死が証明しております」

「あのおぞましい死体と甘つたるい臭気を思い出す。」

九条さやにシルシがあつたか定かではない。だが、確かにあの死に方は、人間がどうこうしたものではなく、この世のものではない何かによるもののように思える。

「八敷様。シルシの恐ろしさはそれだけではございません。刻まれた者は、死を迎えるその日まで、少しづつ記憶が壊されていくのです」

「……え!?」

記憶が……壊れる……!?

「自己が消えゆく恐怖に苛まれながら、やがて死を迎える……。主人もそうでした……。『九条館』の当主であることも、ご自身の名前、年齢、すべて消えてしまったようでした」

「じゃあ今の俺は……。そのときに近づいてるということか?」

「そうです。名前という大切な記憶が失われたのは、死が間近に迫っている証拠……。八敷様、あなたは……」

——今日の夜明けに死を迎えます。

第
1
章

花彦くん



目を開けた先は見覚えのない天井だった。だがすぐに、西洋風の間接照明が視界に入り、俺は溜息を洩らす。

「そうだった……」

俺は『九条館』の一室で眠っていた。メリイと話していた際、立っていられないほどの眩暈に襲われ、二階の客室で休ませてもらっていたのだ。

『どうぞ、鍵の開いている部屋をお使いください』

と、勧める平坦な声を思い出しながら、俺はゆっくり起き上がる。

熟睡したのか、もしくはベッドのスプリングが良質なのか、おかげで随分と回復した。が、右手首に刻まれた痣を見て、再び気持ちが落ちる。

今日の夜明け前に死を迎える。

なんとも唐突すぎる宣告だ。

サイドテーブルの時計を見ると、ちょうど二十二時を迎えたところだった。

もし本当に死ぬのだとしたら、俺の寿命はあと七時間くらい。

そんなことあるわけないと小さく首を振りつつも、九条さやの尋常ではない死に方と、シルシによる記憶障害が今も進んでいることは否めない。

俺は夜明けまで、ただ死を待つしかないのだろうか？ こうして何もできなまま、ただぼうつと……。

詳しい話は、やはりメリイに訊くしかないようだった。

「デ氣分はよくなられましたか？」

メリイは数時間前と変わらず、玄関ホールの赤いソファに座っていた。

「……ああ。こうしてまたお前と話せるくらいには」

「それは頼もしい限り」

と、返してきたメリイの声は、少々トーンが上がっている。人形なので表情は変わらない。だが会話の内容によつて、微量に声の高さやスピードが変化するらしい。喜怒哀樂のようなものがあるということか。

そういうえば硝子玉^{ガラス}のような青い目も、素早くまばたきすることもあれば、ゆっくり瞼^{まぶた}を上下させることもある。

また喋る際、人間と同じように肩や腕もわずかに動くようで、絹糸のような長い髪も、動作にそつて揺れていた。呼吸をしている、とまでは言えない。だが完全に無機質なものとも感じない。よくよくメリイは不思議な存在だった。

それにしても、喋る人形が目の前にいるという驚愕^{きょうがく}の事態にもかかわらず、冷静に分析している自分をおかしく思う。

もしやシルシの影響で、脳の一部が麻痺^{まひ}しているのだろうか？

だとしたら、死への恐怖も一緒に薄らいでもいいだろう。だが、そうはいかないようで、ホール中央に響^{そび}える大時計の音が俺は恐ろしかった。

コチ、コチ……と秒針の虚ろ^{うろ}な音が響くたび、この館全体から「死」へのカウントダウンをされている気がするのだ。

もちろん、この人形の言う『死の宣告』が真実であればの話だが……。

「時計の音が気になりますか？」

表情に出したつもりはなかつたのだが。メリイにはなかなかの洞察力どうさつりょくも備わっているらしい。

「八敷様。やしき夜明けまで、まだ時間はございます……」

含みのある言い方だ。助かる方法があるということなのか？ 尋ねるとメリイの関節がカタリと動いた。

「助かる望みなら、でしようか」

「……隨分と控えめな言い方だな」

「申し訳ありません。残念なことに、詳細を訊く前に主人であるさや様が亡くなられてしまいましたので……。ですが、さや様はシルシの調査をしておりました。死の数日前、あの方は仰おつしゃつたのです。シルシから、逃れる方法があると」

「……え」

「それは!? と俺は身を乗り出す。だが言葉に outs; 前から、メリイは申し訳なさそうにゆっくり目を閉じた。

「具体的な方法は私にはわかりません。ですが……」

花びらが開くように、再びメリイの瞳が見開かれる。

「怪異です」

「怪異……」

「現代科学の及ばぬ存在、とでも申しましょうか」

「よくわからないが……」

「あくまで私の知る範囲になりますが、ご説明いたしましょう」
怪異と呼ばれる不可思議な存在について、メリイは亡き主から聞いた内容を話し始めた。

東京都H市内。

『九条館』も建つこの郊外都市に、一ヶ月ほど前から奇妙な噂が広がっているという。
それは歯形のような『呪いの痣』が刻まれた者は、原因不明の死を遂げるというものだつた。
どこかで幽霊に遭遇した。知らぬ間に祟られるようなことをした。憶測だけが飛び交うもの
の、シルシが刻まれる原因はわかつていない。

そういえば、あの女子高校生たちも、『呪いの痣』とのワードを口に出していたが。

「その噂が、お前の言う怪異と関係するのか？」

「絶対とは言ひきれません。ですがおそらくは……。靈能者であるさや様は、噂を聞きつけ、シ
ルシの調査をされていました。その際、シルシが刻まれ変死した者には、共通点があることを発
見されたのです……」

「共通点……」

「シルシがついてしまった人のことを、さや様は『印人』と呼称しておりました。『印人』は必
ず、H市内に点在する不可思議な場所……怪異スポットへ出かけていたようなのです」

俗にいう心霊スポットのようなものか？ と尋ねるとメリイは小さく頷いた。
「靈障が引き起こされる場所、と思つていただいて間違いないでしょう」

たとえば墓地や幽霊が出ると噂されるトンネル。

古戦場や旧街道。廃墟となつた病院。自殺の名所。

また過去に忌まわしい事件、事故などが起こつた場所を指すとメリイは言う。
つまり怪異スポットとは、都市伝説の類^{たぐい}、科学的に説明のつかない超常現象が起きている場所を指すのだろう。

「その怪異スポットとやらに、シル……『印人』は皆近づいていたということか？」

「はい。そのことについての何らかのメモ書きが残つていて、知人に話したりしていたようです。そして、これはさや様の見解なのですが……。『印人』たちはおそらくシルシが刻まれたことへの恐怖心から、メモを残したり、誰かに告げずにはいられない心理状態^{おちい}に陥るのではないかと……」

そこはなんとなくわかる気がする。

現に自分も、右手首に刻まれたシルシが恐ろしいため、こうして玄関ホールに降り、正体不明の人形とわざわざ話しているようなところがある。それでも死への恐怖は消えない。

だが一人で怯えているよりはずつとマシな状態だ。

「じゃあそういった危険な場所に出向いたヤツが、怪異というものに呪われ、シルシをつけられたというのか？」

メリイは肯定するように目を伏せる。

「はい……。さや様が亡くなられたのも、怪異のいる場所に何度も足を運ばれていたためでしょう……」

なら俺も同じく、怪異スポットに出向き、シルシが刻まれたということになる。

記憶がなくなる前の俺は、果たして心霊やオカルトに興味を持つていてる人間だつたのだろうか？ だから九条さやの名刺を持っていたということか？

だがやはり何度も何度も浮かばない。脳内にはまた、濃い霧が立ち込めるだけだつた。そのとき、コンコンと扉を叩く音が聞こえた。メリイは「おや？」と玄関扉に視線を移す。

「来客のようですね」

「こんな時間にか？ 十一時近くに誰かの家を訪問するなど、非常識な客としか思えないが……」

「仰る通りです。しかし、これも巡り合わせなのでしょうか？ シルシの気配を感じます」

「え？」

「どうやら、あなた様以外にもシルシを刻まれた者がいるようです」

「何故それがわかるんだ？」

「私にも何故かは説明できないのですが……。シルシに関わる人間や現象を、微力ながら感じ取ることができるようなのです。おそらく、さや様が授けてくださった霊力のようなものではないかと……」

すると今度は急かすように、コンコンコン！ と連続して扉が叩かれた。

「八敷様。申し訳ありませんが、私の代わりにお客様を迎えていただけないでしょうか？ 私は腕を動かすことはできても、歩くことはできないのです。いえ、もし歩けたとしても、このような人形がお出迎えしては驚かせてしまうでしょうから」

わかつた、と玄関口に向かう俺にメリイは「ご迷惑をおかけいたします」と一言添えた。

自分と同じ境遇の者。死へのカウントダウンに苦しむ者。シルシに運命を弄^{もてあそ}ばれる人物。果たしてどんなヤツだろうか……。仲間意識とまではいかないが、少なからず興味が湧く。ギイ、と扉を押し開けると、ふわっと石鹼^{せっけん}のようないい香りが飛び込んできた。そのまま「あう」と顔を覗^{のぞ}かせたのは、こんな夜更けにはそぐわない人物だった。

「ここって、九条さや先生のお家でいいんですね？」

セーラー服を着た女子高校生だ。

「わたし、さや先生に相談があつて来たんですけど……」

女子高校生はくるんとした目を見開き、俺の顔をまじまじと見上げる。

「……おじさん、誰？」

おじさん。

記憶はなくとも、そこそこの年齢であることの自覚はあった。でも少しだけ胸にチクリと刺さる言葉だ。

「あ！ もしかしてさや先生の恋人？」

恋人とは意外な球を投げられた。

「写真でしか知らないけど、さや先生すっごく綺麗な人だから、恋人くらいいてもおかしくないよね？ でも結構、おじ専なんだ。意外」

「いや待て……」

君から見れば相当なおじさんだ。けど九条さやからならば、そこまでおじさんでもないだろ

う。そう突っ込みたかったが、大人げない衝動を抑え、俺は静かに首を振った。

「俺はその……知人というか」

『九条館』にいる以上、正直に赤の他人と言うわけにもいくまい。

「弟子、みたいなものだ」

ふーん、と女子高校生は特に疑つた様子でもなく、かと言つて、さほど興味もなきそうに頷いた。

「まあ、さや先生ほどの霊能力者なら、お弟子さん一人や二人いてもヘンじゃないしね。あ、わたし【渡辺萌】つていいます」

渡辺萌は肩にかけているスポーツバッグから、大判の雑誌を取り出した。

「これを読んで、ここに来たの」

雑誌名は『月刊オーパーツ』。心霊からUFO、まじない、超能力など、あらゆる超常現象を取り扱っているオカルト専門誌のようだ。

「わたしの愛読書、つていうか知つてるでしょ？ 女性霊能者特集号だし。さや先生の記事も出てるし」

「あ、ああ。もちろん」

どうやら九条さやのファンのようだ。そういうえば渡辺萌の首には、雑誌の広告でよく見かける怪しげなペンドントが掛けられていた。腕には大ぶりの数珠^{じゅず}。バッグには、UFOや藁人形のキーホルダーがぶら下がっている。

胡散臭いアイテムのフルセット……と言つたら怒られそうだが、どうやらかなりのオカルト好

きらしい。

「で、さや先生は？」

「……ああ、その」

何と返そうかと迷った。が、出張ということにした。渡辺萌が大のオカルト好きだとしても、九条さやの変死体については説明できるものではないし、渡辺萌の年齢や、熱心なファンであることも考慮し、そこは告げないでおくべきだと思った。

不在を聞いた渡辺萌は「えー」と落胆の声を漏らし、がっくり肩を落とした。

「そうなんだ。友達のとこ泊まりに行つてくるつて、抜け出してきたのに……。困ったなあ」と、渡辺萌は口をへの字にした後、「あ！」と何か思いついたように、再び『月刊オーパーツ』を開き、フセン付きのページを差し出す。

「お弟子さんなら、これについてわかつたりする？」

開かれたページには、目立つ書体でこう書かれていた。

【この癌には記憶障害の靈障がござります。癌のある方は一度、九条館までご相談ください。

——心霊治療家・九条さや】

九条さやが書いた記事らしい。横にはイメージイラストが掲載されており、それは動物の歯形を思わせるものだった。これは!?と思わず声を上げてしまつた俺に、渡辺萌の顔がすかさず緩んだ。

「やつぱり知ってるよね。よかつたー。……で、あのさ。ちょっと見てほしいんだけど」

渡辺萌は慌ただしく床にバッグを置く。そして。

「この痣って、やつぱりそのイラストと一緒にだよね？」

と、いきなりスカートの裾を捲り上げた。

顕わになつた色白の太もものには、シルシがくつきり浮かびあがつていて。

「……とにかく入れ。話は中で聞く」

制服姿の女子高校生が、夜更けに玄関先でスカートを捲り上げているところなど、誰かに見られたら面倒だ。俺は周囲を確認しつつ、渡辺萌を屋敷内に招き入れた。

「うわー、すっごい豪華！ テレビで観た外国のお城みたい！ 天井の高さ、うちの何倍だろう？ あ、この壺、めっちゃ高そう！」

天真爛漫といふか、警戒心が足りていないというか。先ほどのスカート捲り上げといい、渡辺萌には純真な子供のようなところがあつた。初めて入る家だというのに、実にのびのびと、思ふがままに振る舞つていて。

「なあ、渡辺さん」

「あ、萌でいいよ。家でも学校でもそう呼ばれてるから」

「じゃあ……、萌で」

メリイのことが気になり、チラリと横目で見たが、目を閉じ大人しくソファに座つていて。

このまま通常の人形モードを続けるということだろうか？ どちらにせよ、萌との会話は聞こ

えているはずだ。喋るか喋らないかはメリイに任せようと思つた。

「それで萌。その癌についてだが」

「うん……」

わかりやすいほど萌のテンションが落ちる。

「さや先生の記事にも、記憶障害の靈障って書いてあつたけど。最近、物忘れが激しくて……」

友達の名前がすぐに出でこなつたり、曜日を忘れてしまつていたり。

買つたばかりのものを、翌日また購入していたりするとのことだつた。

「この前も、同じリップ二本も買つちゃつて。予備と思えばいいんだけど。でも、こんなこと今までなかつたんだ。あと最悪なのが……」

途方にくれた顔で萌はこちらを見る。

「自分の名前がわからなくなつたとき……」

ドクンと心臓が小さく跳ねた。自分の名前を忘れてしまう——俺と同じ症状だ。

「一瞬だつたんだけど、答案用紙に名前が書けなくて……。ねえ、おじさん。やっぱりこれつて、この癌のせいだつたりするのかな……？」

『印人』の記憶が壊れしていくのは、シルシが原因と聞かされている。だが詳しいところは俺もまだ知らないため、言葉に詰まつてしまつた。

すると直後、カタン、と積み木を落としたような音が響いた。

「——はい。その症状は癌によるものです」

「えっ？」

「つまり、シルシによる記憶の欠落でしょう」

なにこの声、どこから？ と、萌は身体を捩ねじらせ、ホール内を見回す。

「ようこそ、『九条館』へ」

「わ……!?」

メリイを見つけた萌の口が、スロー再生のように開いていく。

「に、人形が……喋つ……た」

「申し訳ありません。驚かせてしまいま——」

だがメリイが言い終わる前に、萌は「かわいい！」と黄色い声を上げ、赤いソファに突進していった。

「すごい！ これ、アンティークドールってやつだよね？ こんなに大きいのもあるんだ！ わ、細かいとここまでしつかり造られてる！ しかも喋るとかすごい！ さすがさや先生！」

どうやら驚くよりも、喋る人形への興味が大きいらしい。『メリイ』という名前を聞いては、また「かわいいー！」と大興奮の様子だ。

「ね、メリイちゃん、触つてもいい？」

「どうぞ、ご自由に」

「わ。腕、冷たい」

「人形ですから。萌様のような体温はございませんね」

「そつか。でも、頬もピンク色だし。触らなければ、血の通った人間の女の子って感じだね」

「それは嬉しゅうござりますね」

女子トークとは言いがたい、が、妙に盛り上がっている。萌の感性が普通の高校生ではなくて良かつた。

それにもかかわらず急に喋り出すとは……せめて何か合図をしてくれと、秘かにメリイを見ると、すぐさま大きな目が、パチクリと謝罪するように上下した。

つくづく、よく気がつく人形だ。もしかしたら亡き主人の性格や想いが、投影されているのかもしれない。

間もなくして大時計の鐘が響き始めた。ボーンボーン……と十一回。長々と、まるで空気までも呪うような音だ。

虚ろな一定のリズムに、萌の表情が少しづつ曇り始める。

「……この癌がシルシ確定ってことは、わたし、もうすぐ死んじやうかもしれないんだよね。どうすればいいんだろう」

さつきまでの明るさが消え、首も垂れていく。だが、慰めるようにメリイが呼びかけた。

「萌様、まだ時間はござります」

「そうなのかな……」

「はい。それにあなたはまだ、ご自身の名前も、学生であることも憶えていらっしゃいます。しかし、そちらの八敷様は……」

不意に話を振られ、ぎくりとする。

「ご自身の名前も所在も、忘れてしまっている状況なのです」
えつ、と萌の眉が跳ねた。

「おじさんにもシルシがあるの!?」

「……ああ。話していなかつたが」

九条さやの弟子である、との作り話は残したまま、シルシの治療法を探るべく、九条館に滞在しているという流れにした。

「じゃあおじさんは、わたしより危険な状況なんだね……」

言われて気がついたがその通りだ。名前どころか、自分が何者で、何歳で、どこに住んでいたかも忘れてしまっている俺のほうが、よほど「死」に近いということになる。

「……で、萌。ひとつ訊きたいんだが。そのシルシ、どこで付いたか覚えているか?」

メリイによれば、怪異スポットへ行つた者に、シルシが刻まれるとのことだった。

読みが正しければ、萌は怪しげな場所に出向いていた、ということになる。

案の定、萌は少し言いづらそうに『H小学校』に出かけたと告白した。

「わたし、心霊系の記者を目指してて……。ナマで幽霊とかを見たいと思つてたんだ。そしたら投稿欄で見つけたの。『H小学校』で『花彦くん』を見たって」

——『花彦くん』?

メリイはぴくりとも動かない。だが、反応していることはなんとなく伝わってくる。

「普通の小学校はダメだけど、あそこなら廃校だし、忍び込んでもいいかなって」

「聞いたことがござります。H市内の子供たちの間で、噂になつてゐる幽霊ですね。さや様も興味を持つておられましたので」

「……ということは、シルシと関係する幽霊なのか?」

「一般的には幽霊とも言いますが……この場合、シルシを刻んでいるので、怪異ということになります」

怪異について、メリイが知る範疇^{はんちゅう}の説明をすると、萌の目が急に輝き始めた。いや、この場合、色めき立つのほうが正しいか？ 恐ろしいと思う半面、やはりこの手の話には好奇心がうずいてしまうようだ。

「じゃあ『印人』はみんな、怪異スポットに行ってたつてこと？」

「おそらくはそうでしょう」

流れからして、萌にシルシを付けたのは『花彦くん』であることは間違いなさそうだ。

だが肝心の“それ”を、萌は見たのだろうか？ 質問に、萌は「見なかつた」と首をふるふる動かす。

「……と思うよ。けど実を言うと、よくわかんないんだ」

「どういうことだ？」

『花彦くん』が現れるという『H小学校』の鏡の前までは行つたらしい。だが。

「急に背筋がゾワッとして……、ヘンな寒気もしたし……。怖くなつて、確かめる前に帰っちゃつたんだ」

慌てて自宅に戻った萌は、謎の悪寒^{おかん}が消えないため、カバンを玄関に置いたまま浴室に飛び込んだ。そして湯舟の中で足を伸ばした際、太ももに刻まれた痣を発見したそうなのだ。
「さや先生の記事を読んでたから、すぐに気がついたんだ。例の『呪いの痣』だつて……」
話し終えた萌は「おじさん……メリイちゃん」と不安そうな声を零^ほし、ぎゅっと自分の手を握

りしめる。

その行動はまだ生きていたいことを、俺やメリイに訴えているように思えた。当然ながら俺も同じだ。ここで死ぬのはまだ早いと、生存本能のようなものが告げている。

そんな俺たちの思いを悟ったのか、メリイが合いの手を入れるよう話し始めた。

「お二方の心配はごもつともです。ですが、得てして噂とは歪みやすいもの。人から人へ伝播するうちに、勘違いや思い込みが混じることもあるでしょう」

まだ死ぬと決まつたわけではない、とメリイなりに励ましているのだろう。

「ここで私が提示できる道は二つ」

ハッと萌の両目が見開く。

「一つはこのまま死を待つ道」

「……もう一つは何だ」

「シルシに抗う道です。死と生とは同じ場所にあるもの。もし、そこでシルシが生まれたのだとすれば、それを消す術もそこにあるはず……」

すなわち、シルシの呪いを消滅させるための方法。

シルシを消すための鍵。

その鍵を探し出す以外、シルシから逃れる術はない、メリイは静かに目を閉じた。

「まずは、怪異の出現した場所を、調べてみる必要がありそうです」

「……怪異スポットを調査しろということか？」

「はい。天から垂れる蜘蛛の糸のような、か細い可能性かもしませんが……」

俺は押し黙る。正直、もう少し希望のある話を期待していた。だが現実はそう甘くはないようだ。

怪異について、何の知識もない俺が、シルシを消すための方法を探ることなどできるのだろうか？正しいかどうかもわからない話に望みをかけ、化け物が潜む危険な領域までむざむざ出向くのか？

「どうされますか？シルシに抗いますか？それとも……」

選択を迫られていた。萌が不安そうにこちらを見上げる。

「おじさん……」

何もしなければ、おそらく萌は近いうちに命を落とす。そして俺も数時間後には……。

「ねえ、おじさん……」

自分一人だったら、このまま抵抗しない道を選んでいたかもしれない。しかし年端どしはもいかない

少女が奇怪な方法で殺されるのは忍びなかつた。

俺は覚悟を決め、黙つてこちらを見つめている人形に頷いた。

「……お前の言葉を信じよう。メリイ」

「では……シルシに抗う、ということですね」

望みが薄かろうが、こうなつたらギリギリまで、「死」に弄もてあそばれている無慈悲な運命に立ち向かうしかない。

「かしこまりました。では主人の遺志に従い、このメリイ、お二方にできる限りの尽力をいたしました」

そう言うメリイの声色は、心なしかどこか嬉しそうだつた。

◆◆

その後、メリイの靈力により、怪異らしきものの“氣”を、やはり『H小学校』方面から察知できたため、俺と萌はその地へ向かうことになった。

ガレージに停めてある車を自由に使つてもよいとのことで、キーが差しつぱなしだつたヴィンテージのワゴンに乗り込む。

だが、いざエンジンをかけようとしたところで、助手席から「ねえ」と不安げな声が響いた。
「……あのさ。メリイちゃんの話だと、おじさんってたくさん記憶を失つてるんだよね？」

フロントガラス越しに、ジトリとした目が向けられている。そんな状態で運転できるのか、と
いう意味だろう。

「大丈夫、問題ない……はずだ。ハンドルを握つていれば、そのうちいろいろ思い出す」
実を言うと、半分は自分に言い聞かせてている状態だった。

「なにそれ、なんか怖いんだけど」

免許不携帯であることも指摘されたが、いまはそこに構つてているヒマはない。夜明けまであと
五時間ほど。徒歩で向かう余裕はなかつた。

「命がかかっている状況なんだ。悪いが、少しの間スリルを楽しんでくれ」
「……おじさん、見かけによらず無茶するタイプなんだね」
「実はそうなのかもしれないな」

「……ぐれぐれも安全運転でよろしくね」

それから十分ほどで、なんとか事故に遭うこともなく、ワゴンは無事『H小学校』に到着した。近くに空き倉庫と駐車場があつたため、その一角にワゴンを停めさせてもらい、俺と萌は『H小学校』の通用口を目指す。

月明かりに浮かびあがる校舎は、不気味な佇まいを見せていた。

廃校となつてから数年が経過しているらしく、校舎の壁はあちこちがひび割れ、ガラス窓も何者かが悪戯いたずらをしたのか、すっかり割れてしまつていて。

「いかにも、何か出そうな雰囲気ではあるな」

「でしょ。今日はちゃんと会えるといいんだけどなあ、『花彦くん』」

「……シリシを刻まれてるのに会いたいのか？」

萌はバツグから、何故か双眼鏡を取り出し、にこりと笑う。

「別にまだ、『花彦くん』に会うの諦めたわけじゃないもん。さ、行くよおじさん。抜け道、知つてるんだ。鏡の近くに出られる道」

樂観的なのか、それとも強がつているのか。やはり掴みどころのない娘だ。

「あ、そういえばさ」

先を行く萌が急に立ち止まつた。

「わたしが『九条館』に着いたとき、玄関前でウロウロしてゐる小さい男の子がいたんだよね」

小学校三、四年生に見えたという。おかげで頭で品の良いジャケットを羽織つていたとのこと

だ。

「……で、ここに用があるの？ って訊いたんだけど。なんかビビッた顔して、引き返していくやつなんだよね」

もしかして『印人』だつたのかな、と萌は空を仰ぎながら考えている。

「それはわからんが。必要ならまた来るんじゃないか？」

「だよね。でもこんな危なそうな調査に、小さい子は巻き込みたくないから。帰ってくれて良かつたのかも」

それは高校生のお前も該当することなのだが、と心の中で言葉を返しつつ、俺は萌を追い越し、歩を進めていく。

「あの子のためにも『花彦くん』の呪い、なんとかしなきゃだよね」

「ああ」

そんな話をしていると「ちょっととちょっと！」と、どこからか声がかかった。
「あんたらどこ行くつもりなの!?」

威勢の良い声とともに現れたのは、警備員の制服を着た男だつた。右手には懐中電灯、ベルトにはトランシーバーを携帯している。どうやら巡回中の警備員らしい。

「ここは立ち入り禁止の場所だよ。ほら、ここにも書いてあるでしょ？」

警備員が示したライトの先には【関係者以外立ち入り禁止】との看板が取りつけられていた。
「それとも何？ 肝試しみたいなやつで来たわけ？ ダメダメ、もうすぐ夏だからって、ここはそういう遊び場じゃないんだから。だいたいね、今日は着任当日なんだ。せっかくありつけた仕

事だつていうのに、面倒事はまっぴらなんだよ。ほら、さつきと帰った、帰った

警備員は喋るだけ喋ると「わかつたね？」と威嚇するように片眉を上げ、ぶつぶつ言いながら廃校の中に入つていつてしまつた。

まだ新人のためガードが甘い。着任当日という点に救われたようだ。

俺たちはホッと顔を見合せつつ、そのまま目指していた裏手の通用口まで進んでいった。
「あー、びっくりしたー。前に忍び込んだときは、警備員なんていなかつたのに」

警備員に見つからぬよう中に入り込んだ俺たちは、昇降口前に立っていた。一応、施錠はされているが、ガラスが割れているため殆ど意味をなしていない。

「たぶん、お前みたいなヤツが多くなってきたから、急きょ雇つたんじゃないのか？」

「うん、そうかも。学校でも『花彦くん』の噂、結構出回つてるし」

といった話をしながら、扉の向こう側に差し入れた手で開錠し、さつそく校舎内に足を踏み入れる。

「うわっ。中、暗っ」

想像以上の暗さに、萌は肩を強張らせていた。前に侵入したときは、陽が落ちる前だったのことで、視界が全く違うらしい。

「夜の学校つて、やっぱりヤバい感じだよね……」

恐ろしいものに対し、飄々としているように見えて、やはり怯えているようだ。

現に今も、掲示板に貼られた古いプリントが、風でハラリと揺れただけで「ぎゃあッ」と飛び上がっている。

「ねえおじさん。こんなに暗いと先に進めないんじゃ……？」

「ああ……」

さすがに懐中電灯を使うしかなさそうだ。だが、先ほどの警備員に見つかる恐れがあるため、光が拡散しないように、足元だけ照らしながら進んでいくことにした。

「……で、萌。『花彦くん』が現れるっていう鏡はどっちだ？」

「向かつて右かな？ 突き当たり奥に階段があつて。確か東階段だったかな。そこを上つたところの言う通り、昇降口を右に曲がると、真っ暗な廊下が先へ延びていた。まるでトンネルを思わせる暗澹たる廊下だ。」

そもそものはずで、割れた窓ガラスをベニヤ板で補強しているため、外からの明かりが一切入つてこないらしく、通常なら煌々と光っている火災報知器のランプも、既に電気を止められているため、ただの碎けたプラスチックとなっていた。

「そんなに遠いはずないんだけど。ここまで暗いとわからんないね……」

「ああ。とりあえず行くしかないな」

はぐれてはいけないので、軽く腕を組むようにしながら、俺たちはゆっくりと暗闇に身を投じていった。

それから少し進んだところで、ガシャツと何かを踏んだ。

それは俺の体重に圧され、すぐにバリンッと碎けた。どうやらガラスを踏んだらしい。

ライトを下ろし、床を確認すると、流水のようなガラスの破片があちこちに散らばっている。「萌。下、気をつけろ」

スカートの萌はガラスの断面で足を切つてしまふ可能性がある。

「わ。これ、下手に動いたら、縫う怪我になっちゃうよね。ジャージ穿いとこうかな」持つてゐるのなら最初から穿いておいてくれ。と思いながら、後にしろと促す。穿くだけとはいえ、こんな暗がりで、ごちゃごちゃやるのは危険というものだ。

「りょーかい。……あ！　おじさん。奥に白っぽいものが見えるよ」

萌が示す方向に目を凝らすと、確かに何か見える。

全面が白いため、壁か、もしくは非常口のドアか。前方に人の気配は感じないためライトを向けてみる。そこにはやはり、非常口と書かれた鉄製の扉があつた。

「あの横が東階段か？」

「そう。踊り場に『花彦くん』の鏡があるの」

と萌が小走りになる。だが次の瞬間。

言葉にはできない異様な感覚がグワーンッ！　と奥の闇から迫ってきた。風とは違う凄まじい圧力だ。同時に、ジクリと鈍い痛みが右手首に走つた。

「う……っ」

なんだこれは？　まるでシルシが肉に食い込むような痛烈な痛みだ。これが『花彦くん』の力なのか？

暗すぎるため、萌の表情は確認できない。が、呼吸が荒くなっていることがわかる。

先に進むのは恐ろしい。しかしここで戻るわけにはいかない。

シルシを消すための「鍵」をなんとしても夜が明けるまでに、見つけなければならぬのだ。

俺たちは異様な圧迫感に耐えながら奥へと進み、『花彦くん』がいるときれる東階段を昇つていった。

踊り場に着いた俺は、さっきより視界が開けていることに、ホッと小さく息を漏らす。

どうやら二階の窓は封鎖されていないらしく、外からの明かりが、こちらにも射し込んでいるようだ。

噂の鏡は、タテに長く、俺の全身がすっぽり入るくらいのサイズだった。しかし鏡面は曇っており、俺の姿はぼんやりとしか映らない。

「汚れているが、見た限りは普通の鏡だな……」

俺はそのまま顔を近づけ、曇った鏡面を覗き込む。だが特に何も起きない。

ヒビ割れを指でなぞってみた。が、こちらも変化なしだ。

「んー。おかしいなあ。前に来たときは、すぐにヘンな感じになつたんだけど……」
と、萌がもう一度覗き込む。だがやはり萌の姿が、もわもわした黒い影のように、映り込んでいるだけだ。

「萌。場所を間違えたってことはないか？」

「ううん、ここ。この鏡に間違いないよ」

「……もう少し調べてみるか」

だが急に事態が変わった。萌の姿だと思っていた黒い影が、いきなり左右に揺れ動いたのだ。
「ひあっ!?」

声にならない悲鳴を上げ、弾けるように萌が鏡から離れた。

「なんか今、鏡の中で動いたよね!?」

「ああ……！」

その証拠に萌が退いた今も、黒い影は鏡の表面で、ゆらりゆらり……と漂っている。“それ”は人影のようにも見え、煙が寄せ集まつた奇妙な塊にも思えた。

すると急に、萌が膝から崩れ落ちるようになしゃがみこみ、シルシが刻みこまれた太ももを押さえ出した。

つられるように、俺の右手首のシルシも、ジクリ……と痛み出す。さらに恐怖のためか、意識まで朦朧もうろうとしてきた。

「な、なに、あの黒いの……」

「あの影が『花彦くん』なのか……」

やがて“それ”は、口と思しき辺りを、もやりと動かした。

「ねえ……。ぼく、きれい……？」

弱々しい男の子の声だ。

『ねえ……。どつち……？』

僕^{はかな}げな呼びかけと同時に、黒い影が再び左右に揺らめく。やはり“それ”は、幻覚などではなく、確かに鏡の中に存在しているようだ。

『きれい……？』

繰り返される「ぼく、きれい？」との問いかけ。

何か答えなくてはいけないのだろう。質疑応答の結果次第で、もしかしたらシルシを消す方法がわかるかもしれない。しかし、鼓膜^{こまく}に染み込んでくる恐ろしい声に、顔面の筋肉が硬直し、思うように話せないでいた。

反応がないためか、顔と思しき部分がグニャリと大きく揺れ動く。

『……そう。ぼく、きれい……じゃないんだね』

と、落胆した声が響いた後、さらに影の輪郭がぼやけだし、氣化するように全体へ広がり始めた。

もくもくと、まるで鏡の中に暗雲が立ち込めるような光景だ。

『……赤いの、ちょうどいい』

——赤いの、とはどういう意味だ？

『ねえ……。そこにいるのは……。もしかして……大人、なの……？』

それは単純に「大人か子供か？」という問い合わせなのだろうか？ だがその言い様には、大人に対する嫌悪が混じつているようにも受け取れる。

直感的に、ここは「大人ではない」と、答えたほうが良いように思った。

しかし向こうから俺の姿が見えるのであれば、大人であることは明らかだ。

その場合、嘘を言うのは逆効果かもしれない……。

「ねえ、何か言わないと！」

「あ、ああ……」

早く！ と急かされたものの、どうすればいい？ 何と答えるのが正解なんだ？

考えているうちに、へたりこんでいた萌が「わたしが言う」と鏡の前に立ちはだかった。

『花彦くん』！ ここにいるのは大人じゃないよ!!

『——…』

「ほら見て、わたし高校生だよ！ それにこっちの人はえっと……。クラスでいちばん背が高い人なんだ！ だから大人じゃないよ!!」

だが、少しの間の後、黒い影は否定するように首を搖る。

『大きい人は……来ちゃダメなのに』

突然、鏡の表面にピシッ！とヒビが走った。それは放射線状に中心から外側に伸び、辺りに鋭い破片をキラキラ撒き散らす。

「危ない！」

俺はすぐに萌の腕を引き、降り注ぐ鏡の粒を、すんでのところで回避した。

そして気がつくと、黒い影——『花彦くん』の姿は、もう鏡の中から消えていた。

「……は、『花彦くん』、いなくなっちゃった」

「……ああ。割れた瞬間に消えたようだつたが」

ひとまずここで死ぬことは免まぬかれたようだ。緊張が緩んだ俺は「ふう」と壁にもたれかかる。だが間を置かず、今度は「うああああああーッ！」と、どこからか淒まじい叫び声が聞こえてきた。ひつ!? と再び萌の肩が跳ねあがる。

「い、今の声って!? もしかして!?」

「ああ、さつき外で会つた警備員だろう」

こんな場所にあの警備員以外に誰かいるとは考えにくい。どこかで足を滑らせたのか？ もしくは俺たちと同様、彼もまた見てはならないものに遭遇してしまったのか？ 声のボリュームからして、さほど遠くではなさそうだ。